

ブダペスト通信

盛田 常夫



2022年 NO. 26

UEFA Nations League 第4節でハンガリーがグループトップに立つ

2018-2019年のシーズンから始まった UEFA Nations League は、FIFA（国際サッカー連盟）の国際親善試合期間を利用した、欧州サッカー連盟の新たな国際大会である。従来の親善試合では盛り上がり欠けるために、真剣勝負の国別対抗戦に衣替えして発足したものである。

UEFA（欧州サッカー連盟）加盟 55 カ国が、世界ランキングによって、最上位 A リーグ（16 チーム）から最下位 D リーグまで 4 リーグに分けられ、試合結果にもとづいて、各リーグの上位チームが上位リーグに昇格し、下位チームが下位リーグに降格する仕組みになっている。

2022-2023年のシーズンで、ハンガリーはAリーグに昇格したが、グループ3組(A3)でイタリア、ドイツ、イングランドの3強と同居することになった。大方の予想は3強1弱という評価である。世界のサッカー4大リーグのうち、3つのリーグの選手たちで構成されるチームに囲まれたグループである。

なお、今シーズンの組合せで、Bリーググループ2組(B2)に組分けされたロシアは、ウクライナ侵略によってNations League参戦を禁止され、自動的にグループ最下位となり、来季の降格(最下位Dリーグへの降格)が決まった。他方、ベラルーシは参加を認められ、Bリーグのウクライナと試合がないように、Cリーグ3組(C3)に組分けされた。IOCの制裁対象となっているベラルーシが、国別対抗戦に出場できるのは不可解だが、FIFAもUEFAもベラルーシを制裁対象から外している。その理屈を探してみたが、今のところ、なぜそのような決定がなされたのか分からない。ロシアと区別することで、ベラルーシのサッカー関係者のロシア離れを狙ったものとしか考えられないが。なお、第4節までの成績では、ベラルーシも来季は最下位のDリーグへの降格が濃厚である。

ハンガリーチームの現状

サッカーの試合でジャイアントキリングは珍しくない。ただ、多くの場合は弱小チームとの対戦で、スタメンを2軍選手に落としたために足元を掬われるケースがほとんどで、国別対抗戦でのジャイアントキリングは稀である。

第3節まで、ハンガリーが入ったA3グループは混戦状態にあった。ドイツが3戦とも引分けて勝ち点3、イングランドがハンガリーとのアウェー戦で負け1敗2引分けて勝ち点2、イタリアがホームでハンガリーを下したが、残り2戦は引分けて勝ち点5、ハンガリーが1勝1敗1分けの勝ち点4だった。

今週の第4節で、イングランドはハンガリーに勝たないと、来季は降格することが確実になる。ところが、ホームの対戦で、ボールキープ率こそ勝っていたが、3度にわたってハンガリーに決定的な速攻を仕掛けられた。16分、70分にゴールを決められ、劣勢に立ってしまった。浮き足だったところを狙われて、80分にもディフェンスラインが簡単に破られ、絶望的な3点目を喫してしまった。その直後に、苛立ったDFのスト

ーンズがレッドカードをもらい万事休す。終了間際に4点目を入れられ、イングランドはホームで歴史的な大敗を喫することになった。試合途中から、スタンドはイングランド選手にブーイングを浴びせ、ホームの試合は白けてしまった。

他方、ここまでゴール不足に悩んでいたドイツが、イタリアを5-2の大差で破った。イタリアもイングランドも、今ひとつ冴えない状況が続いている。この結果、第4節を終えて、A3グループの順位は、以下のようになった。

	試合数	勝ち	引分け	負け	得点-失点	得失点差	勝ち点
1. ハンガリー	4	2	1	1	7-3	4	7
2. ドイツ	4	1	3	-	8-5	3	6
3. イタリア	4	1	2	1	5-7	-2	5
4. イングランド	4	-	2	2	1-6	-5	2

グループステージの残りは9月におこなわれる2試合である。ホームで行われる対イタリア戦で引分け以上が、ハンガリーの決勝トーナメント進出の条件となろう。

ハンガリー選手の構成

長い低迷期にあるハンガリーサッカーだが、若い選手が育っている。ドイツ・ブンデスリーグI部ライプツィヒのスタメン選手が3名もいる。キーパーのグラーチ、DFのオルバン（首相との血縁はない）、リアルマドリードも注目している攻撃的MFのソボスライは、ライプツィヒの縦のラインを構成する軸になっている選手である。

ただ、今週の試合ではグラーチがチームを離れ、ソボスライも後半途中で交代した。それに代わって、ブンデスリーグI部グフライブルグに属するサライ・ローランドが2

ゴールを決めた。身体能力が高く、活きの良い選手が、チームを活性化する。シェーフアー・アンドラーシュはユニオン・ベルリンに所属している MF である。

この他に、大迫選手とチームメイトだったことがあるサライ・アーダム（現スイス・バーゼル所属）がヴェテランとしてチームを引っ張っている。サライ・アッティラはトルコのフェネルバフチェの DF として活躍しているし、4 点目を決めたガズダグはアメリカのフィアデルフィア・ユニオン所属である。ほかにアメリカで活躍している選手が数名いる。他方で、国内リーグから選抜された選手は皆、活きが良い。

身体能力があり、疲れを知らない若い力が、やや小柄なイングランドの選手を突破したという印象だ。やはり、所属チームでスタメンを張っていて、パワーがありフィジカルが強くないと、国際試合で結果を出すことは難しい。

伸び悩む久保建英

同じ週に行われた対チェニジア戦で、日本も 0-3 で大敗した。日本代表チームは選手の選考過程にあるから、当面の勝ち負けに一喜一憂することはないが、気になるのは久保建英の状態である。レンタルで武者修行してから、レアルマドリードへ戻るはずだったが、当初の輝きが次第に薄れ、2021-2022 年のシーズンではマヨルカでスタメンすら確保できなかった。久保が低迷している間に、ライバルだったはずのビニシウスがスタメンに定着し、ロドリゴもチームに定着して、久保が入る余地がなくなった。これではレアルマドリードも、久保に見切りを付けなければならない。

久保に足りないものは何か。明らかに身体能力である。メッシやサラーのように、久保並みの身長でも世界で活躍する攻撃的 MF はいる。同世代のビニシウスやファティも体がとくに大きいわけではない。しかし、久保が彼らに劣るのは、対人防御力と縦への突破力である。同じ低身長で長友のように走力があるわけではない。ゴールを決めた後にユニフォームを脱いで体を誇示する久保は、どう見てもまだ少年の体つきで、筋力に欠ける上半身である。少年時代には互角に戦っても、少年の体のままで 4 大リーグの強者と戦うことはできない。相手は皆、久保より一回りも二回りも体が大きく、屈強な選手ばかりである。対人防御に弱いと見られれば簡単に潰される。

香川選手も久保選手並みの体だが、フィジカルコンタクトが激しいプレミアリーグに行ってから、上半身を鍛え、体が一回り大きくなった。しかし、他方で持ち前の俊敏な動きが鈍り、ドルトムンドへ戻らざるを得なかった。香川をスカウトしたファーガソン監督が1年で引退し、香川の特性を活かすシステムが取られなかったことも大きく影響した。ブンデスリーグに戻ってからも、2010-12年に大活躍した姿を見ることはできなかった。

テニスの錦織選手も然りである。技術や試合運びではワールドクラスだったが、身体能力とくに腕や肩の力が致命的に弱かった。まさに少年並みの体である。現在売り出し中のスペインのアルカラス選手（19歳）を見ると、これはもう少年の体ではない。太い腕と強靱な太ももが、疲れを知らぬ身体能力を支えている。世界で活躍するためにはやはり屈強な身体が必要である。久保選手がここ数年のうちに、強靱な身体を作りあげることができるかどうか。有能な個人トレーナーを雇ってでも、速く大人の体を作ってもらいたい。